

関心＝愛情

校 長 武井 正明

娘が小さい頃は巻のアパートに住んでいた。

共働き。妻は加茂葵中、私は岩室中だったので、風の子保育園に毎朝7時30分に送り届けるのは私の役目だった。娘は1歳になり、じゃがいも組に新じゃがとして入荷された。毎朝踏切では「電車はどっちからくるでしょうクイズ（正解はいつも右）」をやっていた。迎えに行くと飛びついてきたもんだ。あの頃は本当に可愛かった…。

その時の担任が短大を出たばかりの保坂先生。この先生が素晴らしかった。彼女は日々の娘の様子を、克明に親との日誌に書き記してくれた。たまに他の先生の時もあったが、書く「熱量」が明らかに違うのである。こんなによく見てくださっている…。「感心」は「安心」になった。そしてすぐにそれは「信頼」になった。

保坂先生と接していてつくづく感じたものだ。教師とは年齢や経験ではない。愛情と感性だ。愛情が子どもへの関心となり、気づきとなる。人格形成に大事な幼少期を、保坂先生に温かく見守っていただけたことは、大きな幸運だった。

年度末から年度初め。多くの保護者の方々が来校され、相談していかれた。

私は、子どもの欠点を糾弾して親子を追い込むことに全く意味がないことを、過去の数えきれない失敗から学んできた。

この世にたった一人しかいない人格だ。保護者から見た家庭での我が子、教師から見た学校での生徒、専門家から見た子ども、多角的、多面的にいろんな情報を共有して、知恵を出し合ってその子をいい方向に導いていく方策を探ることこそ肝要なのだ。

そして、面談する度に思う。

家庭でしか見せない我が子の様子に教師は驚かされ、学校でしか見せない生徒の様子に親は驚く。私は、学校での、生徒との数多くのエピソードをつぶさに話す学級担任の姿に、あの頃の保坂先生を重ねる…。

最初は不安な表情で入室された親御さんが「ここまで見ていて下さるなら…」と安堵の表情で校長室を後にされていく。こんなに嬉しいことはない。

お子さんのことが心配で来校される保護者の皆様。

お子さんについて、いろんなお話を聴くことが私は大好きです。これは決して「ご迷惑」なのではなく、教師の「役目」なのです。お子さんがいい人生を歩いていくのであれば、いくら時間を使っても構いません。吉中生の成長こそ、私の生きがいです。